
カイジンの園と血遊び

らむお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カイジンの園と血濺き

【Nコード】

N8461B

【作者名】

らむお

【あらすじ】

ある日、主人公が出会った一つの奇妙な標本。それをきっかけに、奇妙な人々との出会い、豹変する友人、怪人の影、平凡だった大学生活が音を立てて崩れ出す。……というお話。（予定）

プロローグ

打ちつばなしのコンクリの壁で四方は灰色に囲まれている。中央には、古臭い机にスタンドライト。そこに向かい合うように、パイプ椅子がおかれ、僕と男がそれぞれ座っている。

少ない光源のうちのひとつである、壁の高い位置にある小さな小窓には、ご丁寧な鉄格子までかけられている。

グレーのスーツを着た中年の男は、威圧的な視線を絶えず僕に向けている。

疑われている。しかし、いかなる弁明も彼には信じてもらえそうにない。

だが、再び僕は事の起こりを話す事にした。分かっている。この男の様な一般人には、到底理解してもらえない事を。

しかし、今の僕には、それくらいの事しか出来なかった。僕は超人でも怪人でもないからだ。

「そろそろ、本当の事を話したらどうだ。田口順平を惨殺死体を最初に発見したのは君だろう。冗談ばかり言っていると、君の疑いがますます深くなるばかりだよ。氷室尚人くん」

男は僕の肩をポンポンと叩きながら言った。

「だから、さつきから何度も言っているじゃないですか。あの黒服の女がやったに違いないのです。信じて下さい」

男は肩をすくめ、座った目付きで僕を見つめた。不服だ。こんな態度をとられる覚えはない。

「では、最初からお話しますよ。どうせ、信じてはくれないのですようけど」

一瞬、男は静止し、わざとらしく溜め息をはいてみせた。僕は事の次第を説明するため、最近起こった出来事を頭の中で整理した。

まず最初に妙な事が起こったのは、あの標本に出会ってからであ

第一話 ハイイロの指

窓からは西日がさし、廊下は茜色に染まっている。チャイムが、放課後の訪れを告げ、生徒たちはそろそろと各々の行く先へと移動しだした。

僕がロビーまで下りて、ロッカーを開け上着を羽織っていると、突然ケータイが鳴りだした。田口からだ。メールと言う機能を一切使わず、やたら電話ばかり掛けてくる友達は田口くらいのものである。

溜め息を吐き電話を取った。

「尚人、すぐに研究室に来い！」

「はあ？ 今から？ 今日はサークルの日じゃないでしょ。僕、バイト入ってんだよ」

「とにかく見に来て。面白いから」

そう言っ、一方的に電話を切られた。見に来て、何をだよ。面倒だが向かうことにした。本当に、見るだけなら、それほど時間もとるまい。先程降りた階段を僕は再び昇った。

研究室に戻ると、独特の匂いが鼻をつついた。締めきったカーテンに切れかけた蛍光灯に黒ずんだりノリウムの床。部員が極端に少ない為、研究室兼部室はいつも妙な雰囲気をかもしだしていた。

中を覗くと、高校からの友人である田口順平と、美人教授の荒川仁美先生がワイワイやっていた。並んで机の上の水槽を熱心に見つめている。

「なんだよ、田口。急に呼び出して。またバイト先で怒られたりするの嫌だからな」

「まあ、そう言っなって。マジ面白いから」

田口は、僕がバイト先でどんな扱いを受けようと、他人事のようにだ。今のバイト先の酷さを、ヤツは知らない。

日頃のストレスを全部僕にぶつけてるような説教をするチーフに、

アホな店長、割りに合わない時給。辞めてやりたい。

僕がバイトの事に思いをさせ、イライラが再び戻りかけると、ポーツとしてるように見えたのか、荒川先生に声をかけられ、水槽を見るよう促される。

「見てみなよ。これは非常に興味深いよ」

荒川先生は『興味深い』という単語をよく使う。教授っぽい単語だと思っているようだ。若いからか、その辺のことを気にしているらしい。僕は若いままできてほしいが。

先生に促され、水槽を見つめる。灰色の物体が水槽の底に転がっていた。

何かの指のようだ。腐敗しかかっている。よく見ると、形状は人間のものと似ているが、第一間接が少し長く、とがった爪も印象的だった。

「何なんです？ これ」

先生は少しニヤリとして、答える。

「お化けの指だよ」

嘆息した。冗談も程ほどにしてほしい。第一間接が長いとは思ってたが、こんなものは個人差の範疇だし、ましてや爪など個人のファツションによるので、論外なの言うまでもない。こないだのミイラの次はお化けの指かよ。

「真面目に答えて下さい。わざわざ冗談を言うために呼んだんですか？ カップのミイラやらから全く進歩ないですね」

先生は身をのりだして答える。

「本当にお化けの指なんだから。今回はソースも信用できるしね」
そう言っ先生は僕の顔を覗きこむ。あまり顔を近付けないで欲しいな。

「あ、その顔は信じてないね、きみい。じゃあ、とっておきのを、見せちゃおうかな」

先生は棚からいそいそとガラス棒を取り出し、水槽を覗きこむと、水槽にそれを突っ込み、指の標本をつつきだした。

棒につつかれ、指はコロコロと水槽の底を転がる。と、同時に何やら違和感を感じた。

荒川先生はガラス棒を標本から離れた。水槽の水が揺れているせいか、標本は転がり続けている。

……しばらく標本は転がり続けたが、止まる様子がない。水の揺れは既に収まっている。

おかしい。そして僕は我が目を疑った。

はっている。はっているのだ。指の標本がウジムシの様に水槽の底をはっているのだ。

なんだこれは。カツパのミイラとはわけが違う。

荒川先生がガラス棒でまた標本をいじろうとすると、標本は棒まで自ら近寄って行き、がっしりと棒に巻き付いた。

「んふふっ」

荒川先生はうつすらと笑みを浮かべ、慣れた様子でガラス棒を振り、まとわりつく標本をあしらった。

荒川先生は恍惚としているが、正直僕は気持悪い事このうえなかつた。見てはいけないものを見てしまった気がした。

棒に絡み付く標本から、不気味な執念の様なものを感じたのだ。こんなものをいじって悦ぶなんて、荒川先生も田口もどうかしてるとしか思えない。適当なサークルが見付からなかったからと言って、こんなサークル入るんじゃないかと改めて思った。

「ね。前のは比べ物にならないでしょ。こんなのが、現実にいるとしたらワクワクするよね」

荒川先生は右手をグッと握り締め、熱く語っている。

「ですよ。世紀の大発見ですよ。指だけで動き回るんですよ。腐りかけてるのに。僕、ゾンビもの好きなんですよ。バイオハザード世代ですからね」

田口も完全に浮かれている。何がバイオハザードだ。いい加減にしる。

「あつ。バイオハザード？ 私もやったことある。2だけどね。面

白いよねえ」 完全にこの二人との距離を認識した。

僕は、指の標本から前進像をイメージし、それが校内で暴れまわりパニックになる様子を想像した。夢物語ではない……気がした。

「なんとか復元できませんかねえ。先生」

田口は物好きだな。と、今更思った。というか、軽蔑した。

「指だけのサンプルじゃ、難しいわねえ。現代の遺伝子工学がもつと進歩してればねえ」

「ですよねえ。今、出来る事と言えば、せいぜい薬品ぶっかけて反応みるくらいですから」

「そうねえ。っていうか、なんで私にこれ預けたのかしら。畑中教授」

畑中教授とは、この学校で最も有名な教授である。古生物学の権威とされている。ソースが信用出来るとはこういうわけだったのか。

「どついう経緯でこんなものが、この研究室に？」

僕は聞いてみると、先生は難しい顔をしながら答えた。

「それがねえ。もともと、誰かが畑中教授に調査してくれって頼んだものらしいんだけど、お忙しい方だからどっか行っちゃったらしくて、で、教え子だった私の所に教授の秘書さんが送ってきたのよ。代わりにつてね」

「そうですか。つてことは、いつ、どこで、どのように採取されたかは分からないんですね」

「そうなのよ。それに、興味深い事に、なぜ私なんかの元に送ってきたのかも分からないのよ。そもそも教え子ではあつたけど、それほど親密でもなかったわ。先生とは」

珍しく神妙な顔付きで先生は考え込んでいる。つてか、今の『興味深い』は微妙でしたよ。

しばらくすると、指は落ち着いたのか、動かなくなり水中の浮遊物と化していた。

「じゃあ、そろそろ僕は帰りますね」

「ああ、今日バイトあるんだつたね。気を付けてねえ」

先生は伸びをしながら、答えた。

「あ、あと、このことは部外者には喋っちゃ駄目よ。先生の秘書さんに、内密につて言われてるんだから」

先生はわざとらしく口元に指を当てて言った。

「はいはい。言いませんよ。こんな気味の悪い話を喜んで聞きそうな友達には田口くらいしかいませんし」

帰り際、もう一度水槽を見つめる。田口が水槽の前にしゃがみこみ、じっとそれを見つめている。水槽は西日に照らされ、真っ赤に染められていた。

第一話 ハイイロの指（後書き）

あまり面白くない部分です。

第二話 カンユウの男

けたたたましい目覚まし時計の音が眠っている意識に働き掛ける。窓からはカーテン越しに光がさしこんでいる。

体が重い。昨日の疲れが、抜けていないようだ。事実、あんなグロい物体を目のあたりにした衝撃の後に、あの深夜までのバイトはかなり堪えた。

ゆっくりと体を起こし、身支度を整える。

朝のニュースを見るともなしに見ながら、朝飯をたいらげた。双子座は何位かね。昨日がついてない日なら、今日くらいついていてもいいだろう。

外に出て、時計に目を移す。バスの時間までは、まだあるようだ。アパートの外に見慣れない男が立っていた。近所の人間ではない。まあ、珍しい事でもない。

グレーのスーツにジュラルミンケースを持った男は、僕を見るなり、ゆっくりと近付いてきた。歳は二十七、八。よくみると、右目が腫れ、青痣になっている。

道がわからないのだろうか。この辺りは道が複雑なので、道を尋ねられる事はよくあるのだ。

僕が、近所の地図情報を頭の中で再生していると、痣の男は僕に話かけてきた。

「氷室尚人さん、ですね？」

誰だ？ あっさりと名前を尋ねられたので、遠い親戚のおじさんか何かだと思った。

「ええ。そうですか」

「貴方は原生物研究会に所属していますね？」

原生物研究会とは、あのサークルの名前である。実体はUMAR研究会と化しているが。

しかし、サークル名まで問われる事で、ますます男が誰なのか、

わからなくなつた。

「すみませんが、どちら様ですか？」

男はハツとした様に、答えた。

「すみません。質問がぶしつけでしたね。私は、宗教法人『あけの明星』能動派に属する、望月尚人という者です」

望月と名乗る男は、ゴソゴソと内ポケットから名刺を取り出し、僕に渡した。

「貴方を訪ねたのは、折りいっただお願いがあるからです」

いち大学生に頼み事をする、宗教団体。明らかに怪しい。新手の勧誘か。

僕があからさまに、怪しむ視線を向けていたのか、望月は両手を左右に振りながら言った。

「怪しむのは無理ありませんが、話だけでも聞いてください。悪い話ではありませんよ」

バスの時間が迫っている。さつさと話を付けて行かなければ。

「何ですか？ お願いとは」

「貴方は最近、サークル活動とある標本を見た筈です。あの指の標本を」

あの灰色の指か？ なぜこの男が、あの標本の事を知っている。

荒川先生は誰にも話すなと言っていたが。

望月は神妙な面持ちで言った。

「単刀直入に言います。我々は、あの指が欲しいのです。貴方にしてもらいたい事は、あれを偽物と摩り替え、本物を我々に渡して欲しいのです」

驚いた。

「は？ あんなものが欲しいんですか？」

「ええ。もちろん、タダでは言いません。それなりの報酬は用意してあります」 望月はおもむろにジュラルミンケースに手をかけ、ツメを外すと中から大きく膨らんだ茶色の封筒を取り出した。

封筒を開けると、中には札束が1、2、3……、10束入ってい

る。

「一千万入っています。貴方が無事、私に標本を届けたあかつきには、これらを全て貴方に差し上げます」

にわかには信じられない額だ。あんな気味の悪いだけの標本が一千万？ いや、あの標本が只グロイだけの代物じゃないとでもいうのか。

信じられない。いや、信じたくない。

「お引き受け下さいますか？ 無理強いはしたくありませんが、我々には貴方以外あてがないのです」

男が迫る。

いや、待て。わざわざ、一千万払って僕にやらせる必要があるのか？

うちの大学は私立の三流大学だ。セキュリティもそれほど高いとはいえないだろう。

よそ者がふらふらと、入り込み標本のひとつやふたつ持つてくる事など、簡単な筈だ。

警備員が学生や教授の顔をひとり一人覚えていくわけもない。

「なぜ、一千万も支払って僕なんかにやらせるんです。おたくのうちの誰かが、適当に忍び込んで取ってくればいいだけの話じゃないですか」

望月はなにやらニヤけながら答えた。

「そう思うのは当然ですね。今の貴方の立場では。我々の動きは誰にも悟られてはならないのです。あの標本を欲している人間は我々だけではないのです。不特定多数の人間があれを狙っているのです。畑中が、あれをわざわざ荒川に預けたのは、盗まれる危険性を察知したからです。今、あれが荒川のもとにあると知っている組織は、そう多くないと思いますが、油断はできません。大きな組織である我々はみだりに動くことが出来ないので。その点、貴方が標本に近い立場にあるのは、他の組織にも最早自明です。貴方が標本について何も知らない一般人であることも。つまり貴方に接触し、標本

を獲らせることが最も手っ取り早い方法だと我々は考えたのです」

望月は自信ありげな様子だ。根拠はわからない。

というか、この男はどこまで事情を知っているんだ。

一方で、僕は全く関係のないことを考えていた。一千万の使い道である。バイトの月給が四万とすると、年間で約五十万。大学四年間で、二百万か。一千万あれば、あのバイトも辞められる。奨学金だって解約できる。マイカーだって買えるかもしれない。

標本を盗み出すだけ。あの指一本を盗むだけで、大学生活は大分楽になる。

確かに悪い話じゃない気がする。

「貴方にリスクはありません」

突然、望月は語った。

「もし貴方が失敗したとしても、我々が一千万を貴方に押し払いしただけで、貴方は元の生活に戻るだけです。基が標本ですし、持つてくる最中に誰かに見付かったとしても、貴方は学生ですから、実験で使うとでも言うっておけば、問題ないでしょう。貴方にリスクは無いのです」

男は一步、歩み寄り言った。

「我々は貴方に委ねるしかないので。選択権は貴方にあります」
受けてもいい話だと思った。もちろん騙されている可能性も捨てきれない。しかし単に詐欺師だとすれば、いろいろと詳しすぎると思う。いや、そう僕に思わせているのか。

何にしても今、答えを出すことは難しい。

「少し考えさせてくれませんか？」

望月は大きく頷き、

「はい。では、後ほど名刺の連絡先にお電話下さい。ただし、期限を設けさせて下さい。我々が貴方に接触したということが、他にわかるまえに事を片付けなければなりませんから。本日の深夜十二時を期限とします。それまでになんらかの答えを用意し、お電話下さい」

望月はそう言い残し、そそくさと何処かへ行ってしまった。

時計を見ると、既に一現目が始まっていた。

ぼんやりと、今朝の占いを思い返す。……はて、何だったっけ。どうでもいいか。

僕はちんたらと、学校に向かうことにした。

第二話 カンユウの男（後書き）

何度か推敲しましたが、文章的なボロがかなり出てきました。初めて小説というものを書きましたが、改めて自分の語彙の少なさや、表現力のなさを実感しました。読みづらいですが、よろしくお願ひします。

第三話 キヨウキの実感

代数学の先生が教壇を降り、今日の講義が終わった事を告げる。シャーペンをくるくると回し、溜め息を吐いた。

今日ほど講義が頭に入らなかった日はない。自分でも何と書いたかわからない、めちゃくちゃなノートを見て思った。

今朝あんな妙な勧誘を受ければ、仕方ないのかもしれない。

今日は木曜日。サークル活動の日だ。返事を決める前に、様子を見てみるか。

研究室に來ると、田口が来ていた。机につき頼杖をついてぼんやりと、水槽を眺めている。西日が陰になり、表情も窺いしれない。

ドアを開けて入ってきたのに、僕を見向きもしない。気付いてないのか？

「田口。早いな」

「ああ、尚人か。来てたのか」

田口にしては、気の無い返事だ。

「何してるんだ。ずっとそうやって、眺めてたのか？」

「ああ。他にする事もないから……」

何だか様子が変だ。お調子者のこいつが、ボーツとしてるなんて疲れてるのか。

暫く沈黙が続くと田口は一人言のように呟きだした。

「お前さあ、旧約聖書の創世紀って、知ってるか？」

「……障りだけなら」

「イブが神様に絶対食うな、触りもするなって言われてた知恵の実を食うシーンがあつてな。あれってサタンの蛇にそそのかされたからなんだよ」

「……なんだよ急に。お前も宗教か。」

「でもさあ、それがなかつたら人間に自意識がなかつた事になるだ

る？ 人がパンのみにて生きる事になるじゃん」

「サタンがいい奴だともいうのか？ 悪魔宗教か」

「いやいい奴かどうかは、会ったことねえから分かんねえけどさあ。結果的に悪いことにはなっていないだろ」

「さあ。どうか。僕は聖書には詳しくないし。何とも言えないけど」

田口は天井を見上げた。

「俺はさあ、試してみてもーんだよ。もう一つの果実。命の実の接種をさ」

何言ってるんだろ。こいつは。不老不死の思想ですか？ 古代中国で終わったと思ってたよ。

田口は続ける。

「なんで神が、アダムとイブにそいつを食うな、って言ったかわかるか？ ……神と同等の力を得るからだよ！」

言うやいなや、田口は突然立ち上がり、水槽に手を突っ込んで標本を鷲掴みにし、掲げた。

「これはなあ！ ただの標本じゃねえんだよ！ 命の実なんだぜ！ なんて指先の形してんのかは知らねえが、そんなもん誰も見たこともねえんだから分かんねえよなあ！ アハハハハハハ！」

田口は標本を掲げながら、ゲラゲラと笑い、話を続けた。

「アハハ。こいつに出会ったすぐ後にな、何人が男が訪ねて来たんだよ。フフ。奴らは口を揃えて言ってたよ。どうかそれを譲ってくれませんか？ ってなあ！ 最後に来た、なんだっけ？ 望月とか言うやつはなあ、こいつ渡したら一千万よこす、つつたんだぜ！

ただの標本なわけねえだろ！ 確信したね。こいつの正体を！ そんなもんみすみす渡せつかよ！ ぶん殴って追い返してやったね！」

田口が別の人間に思えた。田口はこんな焦点の定まらない目はない。田口はこんな歪んだ口をしていない。

確信した。狂っているんだ。魅せられてしまっているんだ。

何か……。何か声を掛けたかった。こいつを正気に戻せる何らか

の。

思い浮かばない。何が正しいことなのか。説得力とはどう生じるものなのか。

「た、田口……」

田口は片方の眉を吊り上げ、言った。

「尚人。最後にお前に会えてよかったぜ。人間を辞める最後の機会にな！ お友達さん！」

田口は口を大きく開け、鷲掴みにした標本を、グイと口に押し込んだ。

電流が走った。背筋を一気に駆け上がるように。

「よせ！」

気付いた時には田口に、思いきり体当たりしていた。

田口はテールブル向けて、もろに吹き飛び、机の上のフラスコやらシャーレやらはことごとく倒れ、割れた水槽から水が溢れだし、田口はそれをもろに頭から被るかたちになった。

座り込んだ田口は、僕を見上げ刃物の様ににらみつけた。

標本は既に飲み込んでしまったのか？ くそ！

「てめえ！ 飲み込みやがったな！ そいつはてめえだけのモンじゃ無えだろっが！」

右足を振り上げ、田口のみぞおむけて蹴りとばした。

反して田口はへらへらとした顔でこちらを見上げた。

「俺だけのモンじゃない？ そいつはお前にも言えるだろうが、尚人。会ったんだろ？ 奴らに。一千万なんか、今のお前には喉から手が出るほど、欲しいもんじゃねえのか？ 妹のこともあるしなあ！」

頭にきた。ぎりぎりと奥歯が軋んだ。

「くそ！ てめえ！」

右足を思いきり振り上げ、何度も何度も蹴り続けた。こいつは……。すけすけと！ぬけぬけと！畜生が！

わからなくなってきた。何で、こいつが標本を食おうとしたとき

体当たりしたのか……。

こいつを救うために、止めようとしたのか。一千万を失うから、止めようとしたのか。ムカついたから、体当たりしたのか。

ただ……。ただ今は、こいつが憎かった。どんな罵詈雑言でも罵りきれない程に。

確かに……。確かにこの時は、こいつに殺意を持っていたかもしれない。

考えながらも怒りは収まらず、めっちゃめっちゃに蹴り続け、気付いた時には日が沈んでいた。

田口を見下ろすと、腹も顔も関係なしに蹴りまくったせいか、目はおぞましい紫色に晴れ上がり、ひしゃげた鼻からはダラダラと血を流していた。

呼吸も荒く、目は虚ろだ。

もう、怒りは収まっていた。どうでもいいような気がした。

標本も一千万も田口も。全てがどうでもいい気がした。もう、全て手遅れなんだと。

帰って寝よう。踵を返しドアに向かおうとした……。その時。

がっしりと、がっしりと田口が俺の足首を握っていた。思わずっんのめりそうになった。

「オイ……。待てよ。わかるんだ……。今からが、面白くなるんだぜ！」

晴れ上がった右目を歪ませながら、田口は言った。

さーっと、血の気が引いていくのを実感した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8461b/>

カイジンの園と血濺き

2010年10月30日11時00分発行